幕末維新の伊豆松崎が生んだ偉大な思想家・教師

土屋三余先生

福永慈二

（一）

伊豆松崎の西法寺境内に銘石根府川（ねぶかわ）石を材とする頌徳碑がひっそりと建っている。明治三十四年四月、数多の門人たちの手によって建立された三余塾の師―土屋三余（さんよ）の碑である。碑の題字は維新の大立者勝海舟。撰文は三余畏友の天誅組総裁松本奎堂（まつもとけいどう）と親しく交わり、後に尾崎紅葉・片山潜らを世に出した岡千仞（おかせんじん）。書は当時専ら詔勅・布告を揮毫した日下部（くさかべ）東作である。総工費は八百余円。現代の金額にしておよそ七、八百万円に及ぶ。門下生一同の思いの深さ、師三余の巨（おお）きさが偲ばれよう。

勿論、このような巨大な碑を建てることは三余自身の望んだことではない。三余はむしろ迷惑としたであろう。「土屋三余之墓」とのみ刻印された小さな、何の変哲もない彼の墓石が彼の遺志のすべてを語っている。

土屋三余は、明治維新を遡ること二年前の慶応二年（一八六六年）七月二十四日、故郷生誕の地伊豆中村において五十二歳の生涯を閉じた（生まれは文化十二年・一八一五年）。彼三余は「一粒の麦」として西伊豆の片隅の小さな畑地に落ち、やがてその「一粒の麦」は多くの素晴らしい実を稔らせた。伊豆開発を先導し、僻村の地にいち早く豆陽中学（後の下田北高）を設置し、更に欧米列強の侵出に抗する小国日本

を経済的に潤すべく養蚕を盛んにして生糸貿易に多大の貢献をなした豪農依田佐二平。その弟で北海道十勝原野開拓の礎となった「晩成社」を結成し、辛酸を楽しみ、不屈の精神をもって鋤鍬を振るった依田勉三。佐二平・勉三を支え、自らも使命に燃えて郷土発展に尽くした依田善六、近藤有寿、土屋準次、石田房吉、大野恒哉、松田六治郎、大石唯四郎、藤野圭二など多くの若き門人たちの群。維新後、彼らは伊豆郷里の各処において自らの財を尽くし、交通路を開き、学校を設立し、産業を興し、郷土の発展に身を捧げている。衆目は一致してそれら全てが三余先生薫陶の成果であることを認めている。

しかしながら、現代に生きるわれわれが今刮目して見るべきは、幕末・維新の時代に、南伊豆僻村の草莽の中から、一身を擲って国家（祖国－自分が生まれ育った国）・社稷（集落共同体）・人民（勤労者）に尽くす人物が生まれた背景であり、彼らを支えたバックボーンとしての思想・哲理である。

「時代が人を作る」―幕末と云ういわば民族と国家が危機に瀕した時代が、先進的で革新的な救国の志士・人物・新しい思想家、たとえば吉田松陰・西郷隆盛・勝海舟・坂本竜馬・高杉晋作・福沢諭吉といったような人物、陽明学思想家たちを生み出し、やがて彼らを先導者として時代の根本的転換を成し遂げて行った。熱烈な「尊皇攘夷派」―即ち断固たる「反幕府・開明派」「陽明学学徒」であった土屋三余もまたそうした先導者の一人であった。

幕末の時代、師三余が若き門人達に

語り聞かせた哲理とはいったい何であったのか。『昔から、百姓に対する侍の見下しと差別には許し難いものがありました。今も変わっておりません。士が貴くて農が賤しいという理屈はなく、人の天分・身分に上下の差などあるはずがないのに、です。農こそは国の大本なりとは古来より繰り返し語られて来た哲理です。然るに、この哲理をかつて農自らが声高に唱えたことがあったでしょうか。農家の子弟もまた学を積み、礼節を学び、誇りを持ち、その器を大成させて己の天分天職を極め、全うせねばなりません。そして国家社稷人民の為に至誠を尽くし、農自らが真に農をして国の大本たらしめねばならないのです。私が皆に願うのは、ただそのことだけです。』―三余はこうした言葉を書き遺してはいない。しかし彼の全生涯がそれを雄弁に物語っている。

（二）

土屋三余が生まれ育った伊豆は日本の中で独特な立ち位置をもっている。確かに辺鄙（へんぴ）の地である。が、古来この地には都の文化・習俗が繰り返し流入し、その混合と交流が幾重にも積み重なり、独特な風土を作り上げて来た。稗史にある「伊豆の古史は奇也」との通俗的言辞もあながち間違いではない。

奈良時代の史書に「伊豆国に配流す」との記述が度々登場する。聖武天皇の御代、伊豆は「遠流国（おんるのくに）」の一つに定められた。以後、北端を山に、三方を海と断崖とに囲まれたこの半島には政争に敗れた多くの豪族・貴族・役人・僧侶が「島流し」されて来た。中世には

源頼朝、彼に源氏再興を進言した傑僧文覚が流刑され、この二人が松崎港に近い観音堂で平家打倒の密議を凝らし、二本の“誓いの松”を残した、との言い伝えが聞かれる。更に元寇の後、元の皇帝が和睦の使者として日本に送った中国随一の高僧一山一寧（いっさんいちねい）を、時の執権北条氏が疑い、修善寺に幽閉。やがてその一山が松崎の地に帰一寺を開創すると、都の公家の帰依が相次ぎ、その末寺は五十余を数えた。彼は後に後宇多上皇の懇請で上洛し、南禅寺住職となり、この地は京の都と繋がるのである。また戦国争乱の時代、戦に破れた数多の武将がこの松崎周辺に落ち延びて来た。源平の乱に敗れた平家の武将、応仁の乱を恐れて東に下った豪族、天目山に敗れて大沢に逃れて豪農となった依田一族等々。

こうした事例はこの松崎一帯に限らない。伊豆の幾つかの地域に見られる来歴である。豆史に時々「伊豆の風（ふう）は強中の強」との記述も現れる。由来の解釈は様々であるが〝強気の上にも強気〟〝一途で一本気〟といったような風は「遠流国」伊豆の歩んできた独特な歴史と無関係ではあるまい。さすがに徳川将軍家の御世になるとこの国も「遠流地」ではなくなったが、相変わらず学問と知者・識者を尊ぶ遺風には厚かった。

幕末期になると、この伊豆の国は国防上特別な位置を占め、西欧列強と幕府の動向に左右されることになり、再び「奇史」を歩むことになる。異国船が日本近海に出没し始め、江戸防御のための海防策が論じられるようになると、江戸湾の入り口である浦賀水道と

ともに、伊豆の下田港にも注目が集まった。兵学的に言えば伊豆は「江戸の扼喉」（喉元を扼えつける急所）ということになる。伊豆の北辺―口伊豆に位置する韮山―の代官江川氏は海防・軍学に優れ、幕府はそれを頼りに、ペリーの浦賀開港の要求を拒否し、江戸から遠い下田開港に踏み切っている。

かくの如く、伊豆は古来より国の中枢と絶えず結び合いながら独特の遺風を築いて来た。こうした風土が、幕末に土屋三余という傑出した在村の哲人・教育者を生み出した背景である。伊豆の一種独特な伝統風土と一族の血統家風とを受け継いだ三余は、幕末動乱という荒れ狂う時勢の真只中、『立志』『至誠』『共恕』に生き、伊豆松崎の地に新たな遺風を築き、遺したのである。

（三）

土屋三余―本名宗三郎は、この伊豆の国中村の大屋・土屋家の十二代目として文化十二年に生まれた。

土屋家の先祖は伊豆一帯の支配者小田原北條早雲に仕えた郷侍であり、中村に居住し、郷士としての勤めを果たしていた。戦国末期、小田原征伐に乗り出した秀吉の一隊が北條支配下にあった松崎港に上陸し、地元の寺の古文書が云う「賊兵当国に乱入し、ついに兵火のために山林堂宇ことごとく消失せり」という惨状を齎らした。土屋家二代目惣三郎は、彼らが行なった蛮行を目の辺りにし、武士の世界につくづく嫌気がさし、小田原城陥落後、腰の大小を投げ捨て、農となって土着する。後に一帯の名主となり、村々を守護す

べくひたすら努めた。家風となった「農たる者の誇り」「将たる者の務め」は幕末に生きた十二代目宗三郎にもしっかりと受け継がれ、この混迷・激動の時代に確かな役割を果たして行く。

宗三郎は六歳で父を失い、八歳で母を失うが、これが彼の独立心を鍛え、旺盛にさせた。幼年時代の彼は松崎港に近い道部（みちべ）村にあった母方の実家斎藤家に引き取られた。この家の主は少年の学問好きを見込み、浄感寺和尚本多正観（しょうかん）の開く寺塾に通わせた。和尚は道部の鉄砲鍛冶が出自で、全国行脚の折、安芸広島で琉球イグサ栽培と畳表製造の技法を知り、これを持ち帰り、浄感寺表として完成させ、近隣の村の特産品に発展させた。元禄大火で焼け落ちた本堂を見事に再建し、郷土に尽くした逸材である。この師の下で宗三郎の学問は周囲が目を見張るほどに進歩を遂げた。彼の学問は只の知識に留まらず、その目は書物の中だけでなく現実を直視し、自らの足下を鋭く深く見詰めていた。

彼の性格を良く物語る、或いはまた三余塾誕生の原点ともなった、興味深いエピソードがある。

宗三郎十二歳の夏―七月半ばの或る雨模様の夕暮れ時のことであった。彼は村外れの狭い街道を、家路を急いで走るように歩いていた。ふと前を見ると、誰かが大きな琉球イグサの束を背負って、前のめりに必死に先を急いでいた。丈四尺の見事なイグサであり、滅多に見ない大きな荷の山であった。雨に濡れたら困る、それで駆けるように一心不乱に重い荷物を運んでいるのだろう。その必死の気持ちが伝わって

来て、胸が熱くなる。「おじさん、随分と頑張るねぇ…」、そう声を掛けようとした瞬間、突然「無礼者、道を空けぬか！」の怒声とともに、刀の柄をガシャガシャと打ち鳴らす音が響いた。「ウワッー」という驚愕の叫びとともに、イグサの山も人も、それにつられた宗三郎の体も、飛び跳ねるように傍らの田溝に転げ落ちた。後ろを振り向きもせず去っていく武士二人―紛れもない、江奈陣屋勤めの掛川侍だった。

その後どうしたか、どうなったか、宗三郎の記憶は定かでない。ただ、その泥に塗れて誰かも分からないイグサの男が、わが事を後にして彼を助けてくれたこと。侍の横暴に怒るでもなく、草で拭ったごわごわとした手で、宗三郎の顔や着物の汚れを払い落としながら、「怪我はありませんかの。わしのせいで、えらいことになってしもうて、申し訳ないことです。」と、しきりに謝っていたことだけが脳裏に鮮明に残っていた。

降り始めた雨の中をとぼとぼと家路を辿る道すがら、宗三郎の胸は屈辱感と怒りで張り裂けそうであった。≪なぜだ、なぜあんな馬鹿なことが罷り通るのだ。あれが侍のすることか。避けて通るべきは侍の方ではないのか。それに、百姓はなぜ怒りもせず、黙って耐えねばならないのか。耐えるのが当然だとでもいうのか。≫そう思うほどに、自分も侍に対してついに一言の文句も発することができず、不様にひっくり返されたまま、優しい慰めと介抱を受けていたことが、情けなく、腹立たしくてならなかった。

その夜、宗三郎の話を聞いた斉藤家

の当主は「それが世の中のしきたりというものだ。それに相手は何と言っても掛川侍じゃ。陣屋様に睨まれたらどんな災いが降りかかることやら…決して他言するでないぞ」と手短に答えただけであった。

ところで掛川侍の鼻息が荒く居丈高であったには，それなりの理由があった。天領伊豆は「元禄の地方直し」の際、一部が旗本に配分された。この時、駿河湾に近い松崎・江奈村等は館林藩太田氏の所領となり、その後太田氏は掛川五万石に所替えとなった。掛川は駿河湾を挟んだ反対側にあり、ぐっと身近な存在となり、事情は一変した。江奈の陣屋には半年毎に掛川から役人七、八人が交代でやって来る。領地組足留が常時配置され、睨みを利かせる。さらに村の中は地所持ちの本家と水呑百姓の柄在家（からざいけ）に分かたれ、村人への監視の目は煩くなり、息苦しさが募った。しかも陣屋は掛川の飛地にあったから、上役の目も届き難く、そんな所にも村人の苦労があった。その上に藩主太田氏の始祖はかつて江戸城を築いた著名な武将太田道灌。家康は江戸を本拠地に定め、本格的な城造りを始めた際、この江戸名家の子孫を丁重に遇し、姫一人を側室に迎えていた。為に太田氏は譜代大名に列せられ、藩主の座に就いたのであり、掛川侍の鼻が高くなるのもむべなるかなであった。

さて、宗三郎は先の出来事をきっかけに、一人考え込むことが多くなっていった。村人は、時折何やら難しい顔をしてやって来て、中にある実家の裏山熊堂山（くまどうやま）に登って考え事に耽る彼の後ろ姿を見かけると、「学問をし過ぎて少

し頭がおかしくなったのでは…」と心配そうに噂し合ったという。

―なぜ武士のこのような横暴が許されるのか。何故に士が貴く農が賤しいとされるのか。天下を天下たらしめ、これを支えているのは古来百姓農民に他ならない。その百姓農民がなぜこのような惨めな扱いを受けねばならないのか。

―百姓も武士に対してなぜあんなにも卑屈に振る舞うのか。なぜ牛馬のように黙って言われるが儘なのか…。

宗三郎がこのような問を発する背後には、彼の血の中に脈々として流れる「農たる誇り」「将たる務め」という強い決意があった。これこそ、先祖が刀を捨てて帰農し、代々名主を務めてきた土屋家に伝わる熱い気概であり、宗三郎の精神的支えに他ならなかった。

当然のことながら、まだ歳の少ない彼にはいくら考えても、なぜに対する答えは見出せなかった。そこでこの問を師の浄感寺和尚にぶつけ、その答えを求めた。

和尚は「うーん」と唸り、やがて「いつになっても百姓が武士に頭が上がらないのは学問がないからなのじゃ。」と、呻くように答えた。

「学問…ですか。」

「そうじゃ。学問、学問じゃ。百姓もまた人としての道を知り、その身分に相応しい誇りを持って生きねばならぬ。」

言うまでもないことであるが、和尚には封建制度や身分制度というものに対する批判はない。あったのは百姓農民に対する深い同情心だけであった。

この時宗三郎は家風に思いを致しつ

つ、断然として己の進むべき道を決した。いつか必ず百姓農民のための学問塾を開こう、と。いつか必ず誇りを持って世に立って行く農民を育て上げよう、と。この決意と決断が、やがて三余塾創設に結晶して行くのである。

宗三郎が道部村から中村の実家に戻り、独り立ちしたのは十三歳になった文政十一年冬のことである。叔父の助けを借り、農事に取り組みながら、江戸の人であった帰一寺の和尚について和学・算法を深め、時には江戸へも出向き、様子をうかがった。

そしていよいよ天保二年、宗三郎十七歳の春、故郷を後に江戸遊学へと出立する。折しも、藩主が京都守護職の高位に就き、掛川藩内は大いに湧いていた。

宗三郎は一株の紫竹を庭に植え、これが母屋の屋根に届く頃には、有用の学問を身につけて必ず故郷に帰り、農村子弟に学問を授けんとの決意を打ち固め、家を後にした。遊学費用は十分にあった。水田一町四反六畝、畑園二町三畝、山林四十九町、宅地五反七畝。田一反で人一人一年養えた時代である。

（四）

宗三郎の江戸遊学は九年に及んだ。

彼は漢学・国史を神田お玉ヶ池の名門東條塾に学び、国学は碩学赤城（せきがくせきじょう）の門を叩いた。しかし彼は書物や師から学んだのみではなかった。彼が遊学していた江戸天保期はまさに「内憂外患」の大混迷の中にあった。そして、彼は「内憂外患」に揺れる時勢から学び、国の将来に危機を感じて江戸に蝟集する若き志士・学友との交流からより多

くを学んだ。

一つは「内憂」である。天保の初め（一八三〇年頃）より米価高騰に苦しむ町民の打ち壊しが広まっていた折、東北・関東一円を冷夏が見舞い、これが米価の暴騰に拍車を駆けた。幕府の江戸廻米命令がそれをさらに煽りたて、至る所で一揆・打ち壊しが頻発した。続く「申年飢饉」（一八三六年）は全国に悲惨極まりない生き地獄を生じさせ、死者は十万に及び、幕府の無力・無策は米価・物価の暴騰を引き起こした。甲州大一揆、三河加茂一揆、そして大塩平八郎の乱等々の一揆・打ち壊し・強訴の嵐が国中に吹き荒れ、「内憂ここに極まれり」という有様であった。幸い故郷松崎は大過なく済んだが、各地の民百姓の悲惨な境遇に宗三郎の胸は烈しく痛み、無能の府と化した幕府に憎悪と怒りと募らせた。

もう一つは「外患」である。既に何年も前より英米露等の黒船が燃料の薪水と交易を求めてしきりに来航し、幕府に鎖国の扉を開くよう強く迫っていた。蘭学者たちは西洋文明を論じ、海防を論じ、開国を論じ、国の防備の強化を盛んに説いていた。そうした中「外国船打払令」を厳守する浦賀奉行が日本人漂流民を護送して浦賀沖にやってきた米国のモリソン号を砲撃するという不祥事が起こり、幕府の鎖国主義への批判が一気に高まった。だが、幕府は鎖国政策を厳しく批判した蛮社の蘭学者に弾圧を加えた。この「蛮社の獄」の背後には、二人の幕臣―「蛮社の獄」を断行した保守派南奉行鳥居耀蔵と、それに反対した開明派伊豆韮山代官江川英龍との国防を巡る根深い確執があ

った。まさに鎖国か開国かを巡る二人の争いは幕末動乱の前哨戦であり、国の存亡に関わる一大事に発展していくのである。

当然のことながら、伊豆韮山に通じる若き宗三郎もまたこうした時勢に揉まれ、学友たちと切磋琢磨し、新しい思潮に目覚めて行く。宗三郎の学友は当時の最高学府昌平黌（しょうへいこう）に通う者が多かった。湯島にあった官学昌平黌―ここには各藩から選抜されて送り込まれた優秀な藩士子弟や旗本・直参の子弟が多勢通っていた。そこでは専ら官許朱子学が教えられていたが、勿論のこと学生は密かに異学たる陽明学、洋学にも関心を払い、積極的にそれを学んでいた。またその湯島昌平黌の目と鼻の先の神田お玉ヶ池には剣の達人千葉周作の道場があり、この当代一の武術道場に多くの学塾の門下生たちが通い、腕を競い合っていた。宗三郎もその一人であり、ここで彼は終生の友となる何人かの昌平黌の学友・先輩と巡り会う。当時既に同じ学塾・道場に学ぶ若者同士の間には身分・年齢を超えた真実の交わりが存在していたのである。

宗三郎が特に親しく交わったのは六歳上の塩谷宕陰（とういん）。勤皇思想と尊皇攘夷の魁（さきがけ）たる高山彦九郎に敬服し、「余は士にして儒に非ず」と豪語した江戸の人である。農の出自を誇り、大いなる気概をもって学問に取り組む骨太の宗三郎が大いに気に入ったらしい。宕陰は「文政・天保の大儒の一人」と謳われた在野の雄松崎慊堂（まつざきこうどう）の槍山房にも学び、広く諸国に交友を持っており、その顔の広さは当代随一であった。松崎慊堂は掛川藩校の教授を務めたことがあり、

文政七年（一八二四年）には松崎を訪れていた（三余十歳の時のこと）。その士たる宕陰の手引きで、十六歳上の同じく昌平黌・槍山房に学ぶ日向の人。安井息軒（そっけん）を知る。後に宕陰は詩をもって「学校を退いても倦まず、妻子を設けても衰えず、地位を得ても廃せず、災難にあっても挫けず学問をする」と、息軒の並外れた勤勉努力ぶりを激賞している。‖が、息軒は儒学のみならず洋学・天文・暦数にも優れ、宗三郎に多大の影響を与えた。更に十三歳上の下総千葉の人芳野金陵（きんりょう）が加わる。後に彼が江戸に開いた学塾には、松陰門下生の一人で師の肖像を描いた画工松浦松洞が在籍し、松浦は密かにここから松陰の元に江戸幕府の動向を報せていた。

宕陰、息軒、松洞―この三人は当代を代表する優れた学者・知識人であり、後には揃って昌平黌の教授となり、世間より「文久の三博士」と称された人士たちである。当然のことながら彼らを学友とする宗三郎の学問も大いに進捗し、その名声を高らしめた。彼があちこちの諸侯から藩儒として招きを受けたことがその証である。しかし彼は断固としてこれを断り、田園郷里に帰る道を選んだことは言うまでもない。

江戸を去る直前、宗三郎は赤城の下で和学を学んでいたが、一時期同門に勝麟太郎（海舟）が名を連ねていた。二人は、「百姓・町民、人民のことを忘れては将軍の御世も天皇の御世もあるものでは無い」「処世の大事は無私献身・正心誠意を以って社稷（もってしゃしょく）に尽くすのみ」という一念において、互いに相じるものを持っていたのであろう。おそらく、

お互いに深く共感し合ったに違いない。

（五）

天保十年遅く、宗三郎は故郷中村に帰って来た。留守を預かる者によって見事に手入れされた紫竹の群れは、今や母屋の屋根よりも高く聳え、この家の主の長い空白を数えていた。

親類縁者や総代や村役たちは彼の帰郷を歓喜して迎えた。彼自身も望んでいた依田松崎分家「塗り屋」の一人娘みよとの婚姻の日取りも既に決まっていた。年齢的にも潮時の帰郷ではあったが、家の跡継ぎとして農事に努め、農事の合間に自らも学びつつ早く村の子弟を教え導いてやりたい―これが江戸での学問修行を切り上げて帰郷を決意した本当の理由、真の目的であった。

暫らく前、まだ江戸にいた頃のこと、中国の史書『魏略』に記されたある故事が彼の目に留まった。中国魏の国の人董遇（とうぐう）、長じて大司農（財務大臣）という大官に上り詰めた人物である。若い頃、朴訥にして学を好んだ彼は兄と共に農事に励みながら、少しでも仕事の手が空き閑が余るとすぐに読書に身を投じた。官職に就いてからも学問を能くしたので、周囲から「教えて欲しい」と請われることが多かった。そんな時、彼はその申し出を引き受けようとせず、こう答えた。「必ずまず読むべし。読書百遍おのずから義（い）あらわる」と。教えを請うた者はたいていこう返した。「私はそんなに読書をするだけの暇がないので苦しんでいるのです」と。董遇はこう諭した。「書を読むはまさに三余をもってすべし。冬は歳の余り、夜は日の余り、雨は時の余りなり」と。

この故事に接し、宗三郎―後に号して三余―の胸に、今こそ帰郷して己の天分を尽くそう、との思いが強く迫った。農事に取り組みながら学問に励み、村の子弟の教育に当たろう、と。

天保十二年春、新妻みよの協力を得て、いよいよ自邸内に家塾を開く。名は竹裡塾（ちくりじゅく）。大地にしっかりと根を張り、その葉を常に若々しく艶めかせ、幹は逞しく節くれだちながらもなお高貴な紫の輝きを発している―三余はそんな紫竹が好きであった。竹裡塾は董遇の三余精神に従い、「農家の子弟は読書の故をもって耕鋤をゆるがせにすべからず」を厳守した。

ところで、三余にとって、十年余り続いたこの竹裡塾の時代は、自らの生き方と農村子弟の教育のあり方を模索し続けた〝苦学の時代〟であった。彼はまだ確たる結論を持ってはいなかった。このような時代にただ儒学を教えるだけでは駄目だ。士の学ぶ学問と農の学ぶ学問が果たして同じで良いのか。また農民の学ぶ時間の乏しさ、学ぶ費用の貧しさをいかにすべきか。時代が大きく変動しようとしている今、農村の少年・青年をいかなる方向に、いかなる方法で導いたら良いのか。宗三郎は、これらの回答と時代の趨勢を掴むべく、しばしば江戸との間を往来し、友人との交際・交流を重ねながら、時を待った。

（六）

ここで宗三郎と松本奎堂（まつもとけいどう）・小倉鋸堂（おぐらこんどう）ら勤皇派志士との新たな交友関係について触れておかねばならない。彼らは江戸遊学中に共に陽明学を学んだ同志

であった。

天誅組総裁松本奎堂―彼は吉村寅太郎らと共に、維新を遡る五年前の文久三年八月、天皇の大和行幸を機に全国に先駆けて「尊皇攘夷」の旗を掲げ、勇躍決起する。だが行幸は急遽中止となり、三万余の幕軍によって一千余の部隊は奈良十津川山中に壊滅させられ、奎堂もまた壮絶な敗死を遂げた。

その十一年前の嘉永五年（一八五二年）、奎堂は昌平黌に入校し、宕陰に接している。三余が既に故郷中村に引き上げた後のことである。三河刈谷に生まれた奎堂は、宕陰と親交がある伊藤（いとう）両村（りょうそん）を師と仰いでいた。両村は民衆蜂起を意味する「草莽崛起（そうもうくっき）」を呼びかけた吉田松陰・大塩平八郎と同じ陽明学の信奉者で、「知行合一」を信念とした彼の子弟・行動的門下生からは多くの勤皇志士が巣立った。奎堂もそうした門下生の一人であった。刈谷藩士の子弟であった奎堂は、槍術勝負により左眼を失明し、やむなく学問に転じ、両村塾に入門を果たした豪の者だ。かつて久能山の家康廟に詣でた折、「汝の老猾実に悪（にく）むべし。われ他日志を得ば、必ず汝が墓を暴き、汝が骨を鞭打たん」と詩文に記したほどの型破りの反幕熱血漢であった。その才能を惜しんだ師の薦めで、彼は江戸に出て昌平黌に学んだ。その江戸で師両村と親交のあった宕陰の恩顧を受け、彼を介して三余と相知ることになる。

幕政に強い批判を腹蔵していた三余と二十一歳の若き奎堂とは、十七の歳の違いがあればこそ、たちまち肝胆相照らす仲となった。やがて二人は、長州藩医の子息で吉田松陰と親しく交際

していた小倉錕堂（こんどう）ら各藩各地の勤皇派志士との交流を強めて行く。彼らとの交際がいかに深いものであったかは、後に述べる「中村来遊詩会」に明らかである。

三余十二歳の時のあの忘れ難い体験に発した「士が貴くて農が賤しいはずはない」との思いは、今や時代の先端思想たる陽明学と結びついた「尊皇攘夷」（内実は倒幕開国）へと到達した。彼のその思いを深めさせ、先端にまで押し上げさせたものこそ、激動する時代の力―滾（たぎ）る時勢の流れ―に他ならなかった。

（七）

三余四十歳の春、彼に大衝撃を与えた事件が起こる。下田開港の年、安政元年（一八五四年）三月に発生した「松陰密航事件」である。

前年の嘉永六年六月、突然浦賀沖にペリーの黒船が出現し、日本の世情は騒然となった。当時欧米列強は〝植民地獲得の野望〟と〝産業革命申し子の蒸気汽関〟とを両輪に、アジアの海と日本近海をわが物顔に徘徊し回っていた。大英帝国は既にインドをわが占有物となし、アヘン戦争で清国を破り、香港を植民地となしている。頑なに鎖国を守る日本めがけて列強大国が押し寄せる中、やがて米国東インド艦隊司令官ペリーが黒煙吐く軍艦四隻を率いて浦賀港に入航、江戸城に大砲を向け、幕府に開国を迫った。この近代文明で武装した〝黒船四杯〟の衝撃は、神君家康以来続いてきた「泰平の夢」を木っ端微塵に打ち砕き、狂歌に詠われた如く「たった四杯で夜も眠れず」の世

情を生み、徳川の天下は狂乱と恐慌に包まれて行くのである。

翌年三月、再び来航したペリーは下田に錨を下ろす。「日米和親条約」が締結され、下田・箱館二港の外国への開放が決まった。この時、アメリカ密航を企てていた松陰と金子重之助はしばらく下田蓮台寺村の医師村山宅に潜んだ後、機を見てペリーの艦船に乗り込み、国禁破りのアメリカ渡航を願い出た。「敵と戦うにはまず良くその敵を知らねばならぬ。知るには米国に渡って現物を見るに如かず。論ずるよりもまず行動あるべし」という陽明学徒・松陰一流の愛国至誠の発露であった。幕府とのトラブルを恐れたペリーの拒絶により、この密航の企ては失敗に帰し、二人は捕縛され、獄に繋がれ、さらに師佐久間象山はじめ藩内外の十余名が連座した。三余友人の小倉錕堂がこの松陰密航計画の周辺でこれを支え、密かに下田現地の隠れ家（蓮台寺・医師村山宅）斡旋に動いていた。松陰捕縛の報せを聞き、三余は急ぎ関係信書を全て焼き捨てはしたが、松陰の大胆な企てには深甚なる敬意を抱いた。≪松陰殿の愛国至誠は口先だけでなく、真実のものだ≫と。その五年後、松陰（二十九歳）は「安政大獄」の渦中で処刑される。

ともあれ下田開港を機に、時代は緊迫の度を強め、新しい風が吹き始めた。下田に近い松崎一帯にも時代の変化を告げる緊張が漲った。幕命により、江奈陣屋からも掛川領地組が、ひと山越えた向こうにある下田港の警護に駆り出され、上を下への大騒ぎとなり、新時代の嵐が村々を駆け抜けて行った。

この時、三余は、下田に米国領事館が開かれると、早速門弟の清二郎（せいじろう）（後の依田佐二平）を連れて黒船を見学し、直接「異人」と交流し、鉛筆・画用紙・ガラス瓶などを手に入れ、後に自らも横文字の練習を始めたが、この時清二郎に鉛筆と画用紙を与え、黒船を写生させている。開明派三余の面目躍如たるものがある。

「密航事件」の直後、更なる衝撃が三余を襲う。二度にわたって伊豆一帯が大地震に見舞われた。松崎一帯の村々も大津波に飲まれ、多くの死傷者が出た。田畑が流され、海辺の部落は潰滅的打撃を被った。更に、安政二年の江戸大地震は江戸に死者四千人余をもたらし、世情は不安に満ち、時代の大きな地殻変動を予感させた。≪もはや猶予ならぬ時だ。時代が求める新しい学塾を創ろう。≫三余はそれまでの塾のあり方を廃し、自らが理想とする新しい学塾―子弟が完全に一体となった「耕学両立・師弟同居・全員寄宿・共生共学」のまったく新しい形の家塾の開設を決断する。

（八）

「松陰密航事件」から四年後の安政四年正月、密かに三余を激励する「詩会」が伊豆中村でもたれた。

三余は既に前年五月から新塾の建設に取り掛かっていたのであるが、その年の滅多にない秋の大暴風に襲われ、完成間近の塾舎が倒壊全滅させられるという大変な憂き目に合い、未だ再建の渦中にあった頃である。この「詩会」は、三余の新塾発足のお祝いと再建激励を兼ねたものであった。会には地元

の友人も集まったが、何といっても三余を喜ばせたのは、奎堂・錕堂二人の来遊であった。士分の彼らがわざわざ江戸からこのような田舎までやって来て詩を詠み、酒を酌み交わし、義太夫・新内まで唸って励ましてくれたことが格別に嬉しかったのである。

その頃、奎堂も名古屋に下って塾を開く計画をもち、錕堂もまた松陰に松下村塾の手伝いを懇望されていた。それ故、三余の塾がいかなるものか、当然関心浅からぬものがあった。

この時代の「学塾」について少し説明しておこう。当時の寺小屋塾は庶民の一般的な教育施設であった。七歳前後から一～四年通い、読み書き・算盤の初歩を学ぶ。師匠はたいてい浪人、僧侶、神官、医者で、入学金・授業料も一応決まってはいたが、有る者からは取り、無い者からは取らない、というのが普通であった。武士の幼年教育は藩独自の教育組織で行なうか、家庭ごとに行なうのが通例であった。こうした初等教育の上に、専門的な高等教育機関として官立「昌平黌」や「藩校」があり、さらに民間に「私塾」があった。ここで強調しておかねばならないことは、官立校の多くは文字通りの「学問所」であったが、民間に開かれた「私塾」は空理空論を排した実学中心が多く、「学塾」というよりむしろ「思想塾」と言った方が適切なものが少なくなかった。したがって武家の子弟であってもこうした私塾に入門して学ぶ者が少なからずいた。私塾としては、松陰の松下村塾、緒方洪庵の適々塾、大塩平八郎の洗心洞、佐久間象山の洋学塾などが有名である。こうした塾では師の

思想がその教授内容・方法すべてを決した。その意味において、庶民相手ではあったが、三余の新塾もまた一個の「思想塾」であり、彼の思想が全てに貫かれていた。

三余は二人の友人に問われるままに、新塾建設に至るまでの長い道のりについて、或いはこれに託さんとする自らの思いを縷々語った。

「今、私が開こうとしているのは、耕しつつ学び、学びつつ耕し、師弟が寝食を共にして実学としての学問、哲理や礼節を学ぶ家塾です。私は何としても、この郷村で村の子弟の大成を図り、明日の日本の農を導く若い力を育て上げたいと願っているのです。幸いこの母屋の裏にはいくらかの田畑があり、耕学両立にはもってこいの場所です。それに私の手許には多少の山林も残されておりますから、四、五十人の塾生を寄宿させ、共同生活・共同学習をさせるくらいのことはできます。」

三余は痛感していた。もはやのんびり時間をかけて子弟を教育しておれる時代ではなくなった。財を尽くしてでも明日の農村社会を担い導いて行く若きリーダーを育て上げねばならない。農民・庶民の中から、郷土あるいは国の新しい道を切り開いて行くことのできる能力ある人材を育て上げねばならない、と。勿論この実現のためには妻みよの協力が不可欠であった。気丈なみよは、塾の財政や家計のことは一切自分に任せ、貴方は教育に全力を注いで欲しいと、きっぱりと伝えていた。後顧の憂いは何一つなかった。

奎堂は、豪快に笑って言った。「はっはっは、いかにも三余殿らしいですの

う。江戸にも京にも勤皇の浪士となって一旗揚げようという〝身上がり願望組〟がわんさと居る中で、敢えてこのような片田舎に留まって郷村の人材を育てようとは！」

実際、幕末のこの時代、農民・町人でありながら学塾や剣道場等で頭角を現し、武門に目を掛けられる者も少なからずいた。金銭さえあれば、どこそこの藩が密かに売りに出した士分株を買い取って武士になることもできた。豪農の中には御用金・献金を出して苗字帯刀の許可や士分を得る者もいた。激動と大乱の時代である。農民・町人の身分を脱し、士分にのし上がろうとする〝身上がり〟願望が至る所に渦巻いていたとしても不思議ではない。だが三余はそれを嫌った。嫌ったというより土屋家に流れる脱士帰農の血がそれを許さなかった。或いは、少年時代に脳裏に深く刻まれたあの強烈な屈辱と憤怒の体験が、それを首肯させなかった。

「いかにも農の出自を誇られる三余殿らしい。いかに諸国に学塾多しと言えども、このような志をもつ塾は他にありますまい。」錕堂は賞賛の言葉を惜しまなかった。そして、やや紅潮した面持ちで、口を継いだ。「萩に蟄居させられている松陰先生も、此度身分を問わず、学ぶ意欲に燃える門弟を松下村塾に集め、新しい国づくりのための人材を育てることに情熱を注いでおられます。」

陽明学者・松陰は刑罰蟄居の身でありながら松下村塾を起こし、「倒幕やむなし。今こそ猛を発し、孟子の〝民衆が最も尊く、社稷がこれに次ぎ、君主

は取り替えてもよい〟との教えを行うべきだ」と公然と主張し、門弟達に倒幕の檄を飛ばしていた。そして倒幕蜂起にあたっては、諸藩の中に人がいない以上「草莽」すなわち百姓町人・徒歩足軽を頼みにする外ない、との考えであった。

「ほぅ、やはり松陰殿もそう考えておられるのか。わしも近々名古屋辺りに私塾を開いて草莽の内に陽明学を広め、いずれ諸国の志ある志士と連絡を取り、御旗を掲げて倒幕の狼煙を挙げるつもりでござる。」

奎堂は既に何かを決意していたらしく、その目は爛々と光を放っていた。三余は彼のその目に籠もる「いずれ共に」との強い願望を痛い程感じていた。

「いつか士農工商などという身分違えの制は崩れ、四民平等の世がやって来るはず。今の私は勇猛の志士を育てることより、新しい時代の郷村、日本の農を引っ張っていく大人材をこそ育て上げたいと思っているのです。放伐維新は士分の皆さんにお任せしましょう。」

あくまで農に拘る三余は、勤皇・佐幕両派の武力絡みの抗争、すなわち幕末政治から一定の距離を置いていた。ある意味、ここに三余の限界があった。しかしながらその限界は当時の農村社会が持つ「歴史的制約」の反映でもあった。

この問題についてもう少し詳しく当時の状況を明らかにしておこう。何故ならこれはその後の門人達のやや政治方面に距離を置いた生き方に少なからぬ影響を与えて行くことになるからである。

幕末から維新にかけて、草莽すなわち民百姓が明確な意識をもって倒幕運動に決起したという例は少ない。長州藩における農民・町人が参加した奇兵隊などの諸隊、北相馬の大地主が出自の相良総三を隊長とする赤報隊など数えるほどの例しかない。しかもこれらに加わって戦った農民・町民は、最後には皆官軍・新政府に切り捨てられ、惨めな結末を遂げている。三余の親友松本奎堂ら天誅組の倒幕蜂起に合流した十津川部隊も郷士であって、農兵とは言い難い。幕末混乱期に、相次ぐ物価高騰・重税・軍役・軍用金に耐えかねた民衆が、近畿一帯と江戸に起こした打ち壊しも、関東一円を席巻した武州世直しも、各藩各領内で繰り広げられた数多の一揆も幕府の土台石を揺るがせはしたが、ついに倒幕に向かって蜂起するまでには至らなかった。「百時御一新」「万民苦救済」を掲げ、末期徳川幕藩体制下で呻吟する圧倒的多数の農民・町民の代表者となって倒幕運動を直接担った根幹の力は、薩長を核とする数多の下級武士団であり、多くの大商人であった。奥伊豆の片隅に在ったこの界隈の村の百姓衆も、下田周辺に吹いていた新風―将軍家の世が終わりつつあり、新しい文明の世が開かれて行くという「維新の風」を十分肌に感じてはいたが、相変わらず日々の農事に忙しかった。理屈はともあれ、刀狩から既に二百数十年余が経ち、今更自らが刀や槍を持って世直しに立ち上がろう等とは夢思わなかった、というのが実情である。

明治維新においては、西欧フランス革命のように、市民、農民、民衆が蜂

起して封建体制を倒し、自らが新しい政治体制の確立に参加していくということにはならなかった。その結果、日本の社会にはより濃厚に封建的残りかすが残って行くことになる。天皇制の遺制がそれに輪をかけた。古臭い意識や慣習というものは、それを生み出した環境や古い体制に対する激烈な異議申し立ての行動を通じてのみ払拭することができる。そうする中でのみ人間は根本的に変わっていくのである。歴史と言うものは、いつでもどこでも理想通りに行くものではない。何の曲がり道もなく、まっすぐに進むというものではない。

三余はきっぱりと言った。「私はここで、新塾を砦に、皆さんと共に、私なりの尊皇攘夷を戦う決心です」と。もはや何の迷いもない。目の前に己に与えられた天職がある。「至誠天に通ず」だ。一所懸命にこの道を進もう。その一念であった。

数日後、勤皇派志士二人は松崎の港から風雲急を告げんとする江戸を指し、勇躍旅立って行った。そして彼らが再び会することは遂になかった。やがて始まった疾風怒濤の時代がそれを許さなかった。

（九）

安政六年二月―松陰が処刑される暫く前、塾舎再建が成り、新塾が伊豆の僻村中村に産声を上げた。

ちょうど尊皇と佐幕・革命と反革命の血生臭い幕末動乱の嵐が巻き起こっていた頃である。塾開設の年、春嵐が吹き始めると共にいよいよ時代が動き出した。下田の米総領事ハリスは「清

国を攻めた英仏連合艦隊が日本を襲来する」と脅しながら、「通商条約」の早期締結を強く求めた。結局このハリスの「脅迫」に屈するように、時の老中井伊直弼は密かに米国との間に不平等条約として悪名高い「通商条約」を結ぶ。そして徳川生え抜きのこの譜代派老中は、「勅許無き条約締結」を非難する幕府内反対派を一掃すべく、一気に「安政の大獄」を発動した。血で血を洗う恐怖政治の始まりであった。やがて倒幕維新の第一級の指導者松陰・橋本左内や勤皇派志士が次々と刑場に送られて行った。その直弼が、今度は水戸藩の浪士に「桜田門外」で暗殺される。将軍家お膝元の江戸と御所の京都は抗争の震源地となり、「開国か攘夷か」「尊皇か佐幕か」「公武合体か否か」を巡る激闘が始まった。幕府批判を強める薩長両藩・勤皇派志士と朝廷との提携が密かに動き出す。三余の新塾開設から数年後、「尊皇攘夷」の旗印が公然と掲げられ、幕政批判は倒幕革命運動に転化し、奎堂ら天誅組の最初の倒幕蜂起を引き起こし、畏友奎堂の敗死へと突進むのである。

三余はこの新しい塾を「三余塾」と名づけた。三余はその喜びの心境を「三余窟新成」と題する一編の詩に託して、こう謳った。「業をなすに時あり今その時なるべし…十年の苦学も一朝にして新たなり」と。彼がこの三余塾を作り上げるためにいかに苦労を重ねたかが偲ばれよう。

三余塾はこの時より僅か七年の運営であり、その活動年月は決して長くはない。が、達成したものは決して小さくはない。三余門下の若者たちは、明

日の日本の農と郷村・社稷を導く大人材たるべく、必死に学び、よく師の期待に応えた。

三余が死去した慶応二年（一八六六年）、幕府軍は第二次長州征伐に敗退。翌年十月、十五代将軍徳川慶喜は大政を朝廷に奉還した。鳥羽伏見の戦いから、明治元年四月の江戸城開城・戊辰戦争を経て、徳川幕府はついに二百六十余年続いた命脈を絶ち、ここに革命維新が成る。

（十）

三余塾の七年が多くの若者たちの一生を決めた。「三つ子の魂百まで」という俗諺がある。「思想が人を捉えると巨大な熱源に転化する」との格言もある。確かに幼少期に受けた精神的影響がその人間の一生を左右したという例は少なくない。暫く彼らが当時学んだ「共同・共学」の三余塾の日常風景を辿ってみよう。

師三余は常に、「知行合一」「実践（じっせん）躬行（きゅうこう）」、すなわち必ず知を行動に移し、自ら実行しなければならない、と教えた。全員が寄宿し、師弟がともに生活し、田畑を耕しながら礼節・学問を修めるという新しいスタイルの学塾を発足させたそもそもの目的も、そこにあった。

土屋家の母屋の裏にあった塾舎の玄関を入ると横長に広い上がり口があり、その先に三十畳もあろうかという廊下兼講堂兼食堂が続く。優に四、五十人が座れる。その左右に八畳敷の四つの塾生用学習部屋兼寝室がある。更に書物に埋もれた先生専用の大きな部屋があり、塾頭・当番用の小部屋が三つ並

んでいる。先生始め全塾生とも寝具は薄い敷布団と小さい夜着のみだ。一番奥には、家が貧しく時折にしか学べない者、晩学・遅滞学習者のための大部屋「無名窟」があり、その左隣の奥まった所に湯殿と炊事部屋がある。風呂は月三回のみで、一番年少のものから使い、順次年長の者に及び、最後に先生が入る。当時の常識ではまったく考えられないことであった。風呂の順番もさることながら、更に驚くべきは、長幼の序の厳しい封建の世で、全ての塾生を「さん」付けで呼んだことだ。そこに、塾生を自分と同じ一個の人間として尊重し、深い愛情と信頼と厳格さをもって訓導・指導せんとする三余の強烈なヒューマニズムがあった。炊事もすべて先生がこれを行った。一汁一菜が原則で、質素この上もない。時にはアクの抜かれていない蕗や山菜が出てきたり、腸を抜いていない鮒が汁に入れられたりと、塾生はその不味さに大いに閉口したらしいが、先生はまったく意に介する風もなかったようだ。食事には袴着用が義務付けられ、何よりも食と農に感謝を捧げ、礼儀と姿勢を正しくすること、人間としての品性の向上を図ることに意が注がれた。

生活維持費は、金ある者が納めた月俸（月謝）、物ある者が収めた米・野菜・魚・山菜、塾の産する米・野菜等によって賄われ、不足は先生がこれを補充した。月謝は特に決まっていたわけでなく、父兄の意のままであった。「これは孔子も取られたから」と受け取った入門料以外に謝礼を求めることはまったくなかった。「塾の産する」とは、先生・塾生ともにいくらかの割り当ての

田畑を持ち、各自が責任を持って耕作し、収穫を計っていた米・野菜のことだ。

先生はこうして率先して共学同宿の場の清掃を行い、食事を作り、田畑を耕し、体を鍛え、質素倹約を励行し、学問・思想を深め、身をもって範を示しつつ子弟に教授した。塾生はこうして常に先生と起居を共にし、身近な先生を範として学び、共同生活の中で、貧富上下の区別なく、互いに助け合い、恕（人を思いやり、助け合う）を身につけ、切磋琢磨して学問・思想を修めて行ったのである。

さらにまた、塾生は、日常的に実践すべき作風を、先生作の「姑息吟」「莫懶歌」という詞を繰り返し唱和することによって、能くこれを身につけた。四章八十字からなる「姑息吟」は、姑息すなわち一時逃れを排し、日々休むことなく学問に努めよと詠っていた。五章百字からなる「莫懶歌」は、懶ることすなわち怠けること莫く、早起き、清掃、音読、敬人、忠孝、学問に努め、人に恕を厚くせよ、と謳っていた。毎日早朝、塾生がこれらの詞を唱和し、経書を勢いよく音読する音声が、辺りの山峡に木魂し、村人を愉しませた。

先生の講義は、まず日本国史を通じて日本の武将達の生き方・身の処し方・政の仕方を論じ、上に立つ者の心構えについてよく教え、その上でそれを裏付ける哲理として中国聖賢の書を講じ、繰り返し素読させた。農を出自とする塾生が、いずれ来るであろう新しい四民平等の世において、その指導力を発揮し、民百姓を率いて社会に貢献しうる人材に大成すること。三余先

生がひたすら求めたことはこの一事である。

後に「十勝原野開拓の人柱」と謳われた依田勉三。「晩成社」を結成して十勝野開拓に鋤鍬を振るったこの男は、農旗を掲げて国家社稷人民に尽くすことを志し、何よりも質素倹約、勤勉努力、実践躬行、不撓不屈を貫いた。晩成社は滅び、その身は十勝野原野に朽ち果てたが、十勝野は開け、彼の農魂は今尚不滅の光を放っている。まさに三余教導の賜物であったと言えよう。

（十一）

その勉三が三余塾に入門して一年後の春のことであった。

「柄在（からざい）の伊助」が、三余塾にやって来て、時々無名窟に寝泊りしながら勉学に打ち込むようになった。無名窟は塾舎の一番奥にあり、家が貧しく時折にしか学びに来られない者、晩学・遅滞学習者のための宿泊兼学習部屋だった。「柄在（からざい）」というのは「小作・水呑み百姓」のこの地方独特の呼び名である。これらの家はどこも貧しく、子供も朝から晩まで家の手伝いに駆りだされ、とても勉学どころではなかった。実際、三余塾の門下生もそのほとんどが土地持ちの本百姓の子弟か、商家や職人の子弟であった。

伊助を塾に入れたのは三余先生だった。たまたま畑の土に棒で「いろは」を熱心に練習している伊助の姿が目に留まり、雨の日や仕事が早く終わった夕べは塾に来させるよう、父親に掛け合ってくれたのだ。勿論月謝など不要ということであったが、伊助は仕事の帰りに茸・山菜・木の実などを沢山採

って来て、塾生の食卓を賑わせ、皆を喜ばせた。

無名窟にはたいてい五、六人が寝泊りしていたが、専らその世話に当たっていたのは塾頭をしていた豪農依田一族の長男にして勉三の兄清二郎（後の佐二平）である。偉丈夫で、学問に優れ、人望も厚く、いささかも偉ぶったところのない清二郎は、皆に頼りにされていて、うってつけの塾頭であった。卑屈になりがちな無名窟の門下生達も、彼の優しい人柄に触れ、すぐに懐いた。特に伊助は、自分のような者を「伊助さん」と呼び、勉学だけでなくあらゆる面で細やかに気遣ってくれたこの塾頭を、崇めんばかりに敬っていた。

その塾頭の弟で、同い年ということもあってか、勉三はすぐに伊助の親しい友になっていった。きっかけは、身体の汚れに気後れし、入浴を遠慮していた伊助を、勉三が根気良く誘い続け、ついに一緒に風呂桶に飛び込んだことであった。

「伊助さん、あんたの体の汚れは野良の仕事の汗と泥、武士でいえば戦場で浴びた返り血、百姓の勲章のようなものだ。なんで恥ずかしがることがある！」という、勉三の叱責にも似た忠告の言が、伊助の頑な「身分意識」を打ち砕いたのだった。

その伊助の居た無名窟の塾生たちが、三余先生の下で担当農事として養蚕に当たることになり、これに清二郎・勉三が協力することになった。先生の話では、今でもこの地域に自生の桑の木が見られるが、昔はこの辺りでも養蚕が行われていたというのである。大沢村の依田家の裏山にある大きな桑の木

はその頃の名残だという。結局、蚕の養育が難しく、収穫が安定しないため、いつしか携わる家が無くなってしまったのだ。だが今でも、大沢の奥地の山家では、僅かな年寄りが自家用にと蚕を飼い、糸を紡いでいた。

三余先生が養蚕に目を向けたきっかけは、江戸の友人から貰った便りに書かれていた「異国人は日本の繭を大いに好み、高値で買い取っている。繭こそは日本の国を富ませる金の卵だ」という一文にあった。

「今は色々な蚕種があり、この地域に合うものがあるかもしれない。あれこれの蚕種を試してみたい。うまく行けば、この地域にとっても、わが国にとっても、大きな幸運をもたらす事業になるはずだ。」というのが先生の考えであった。

先生は清二郎や伊助らを山家の老婆の元に送ってその養蚕法を学ばせ、時々松崎辺りにまで足を延ばす信州の繭商人をお茶に誘い、必要な知識・技術を仕入れた。

無名窟には年上の者も何人か居たが、伊助のこの仕事への打ち込みようは並大抵のものではなかった。新しく手に入れた蚕種を、教えられた通りに忠実に養育するために、蚕室用に改造された物置に寝泊りし、それこそ寝食を惜しんで世話をし続けた。確かに、室温や餌の時間や桑量の管理など、いささかの油断も許されない。毎朝毎晩大沢の裏山に通い、新鮮な桑の葉を摘む作業も絶対に欠かしてはならないことであった。伊助はこれらの世話や作業を喜んで引き受けた。

清二郎は専ら観察と記録面で彼らを

支え、勉三は彼らが留守中の餌やりを手伝った。伊助らを幾分軽く見ていた塾の仲間の目もやがて一変し、自然に協力的で激励的な雰囲気が生まれていった。

ある日、勉三が「伊助さんにとって蚕は大事な弟か妹のようだね。いつか蚕が伊助さんを助けてくれるにちがいないよ」と言うと、彼は激しくかぶりを振り、「いいえ、私にとってお蚕様は、三余先生同様、神様のような存在です。」と、強く言い放った。

養蚕がいずれ自分の身の助けになるから、ということではなかった。「もし養蚕を再び興こすことができれば、郷土の為になり、日本国の為にもなる、先生はそうおっしゃって私たちにこの仕事を担わせてくれたのです。そんな大それたことが、この私のような柄在の貧乏たれにもできるのです…」と、伊助は目に涙を滲ませた。

この話を聞いた勉三は≪そうだ、自分たちが今ここで学んでいることは、すべて郷土・社稷のため、日本国と人民のため、それが三余先生の教えだった。他の誰よりも自分の土地財産が欲しいはずの伊助さんなのに…。それなのに自分は…≫と、自分の甘さ、愚かさを深く恥じ、強く責めた。

この養蚕実験が二年目に入った夏、伊助は突然塾を去らねばならなくなった。父親が無理をして借りた川沿いのイグサ畑が大水に流され、借金の形にやむなく彼は江戸の畳屋へ奉公に上がらねばならなくなったのだ。しかしながら、別れに際し、彼はいささかも落胆した風を見せず、

「我が家には土地財産は何もありま

せんが、ここで学んだことこそ私の生涯の財産です。それに、後に思い残すことは何もありませんし…」と、笑って見せた。

尊敬置く能わざる塾長・清二郎が、この養蚕実験に込めた自分の「郷土・社稷の為に」という篤い志を受け止め、残った無名窟塾生と力を合わせて、最後まで必ずやり遂げることを約束してくれていた。それが、彼にとってはこの上もない餞だった。

三余は、柄在の伊助が、佐二平や勉三、その他の塾生にはないもの、貧困と逆境の中で鍛え上げた強烈な反骨魂、飽くことなく結果を求め続ける不屈の意志、といった徳性を持ち合わせていることに深く感心させられ、驚かされていた。この無名窟の子弟の旅立ちにあたって、三余は、その徳性をさらに伸ばし、磨き続けるよう、伝え、強く激励した。

清二郎は、維新後にこの地方に早場繭を産する養蚕事業を興し、松崎を日本有数の繭の産地に仕立て上げている。言うまでもなく、勉三もこの事業に加わり、よく兄を助け、三余先生と伊助ら無名窟住人の夢の実現に尽くした。

勉三や塾生の心の奥底に、伊助の思い出と共に、三余先生の「農もまた私を去って郷土と社稷、国家と人民の為に尽くさねばならぬ」という教えが鮮明に刻み込まれた。

（十二）

依田勉三は十二歳の夏に起きたあるでき事を終生忘れることがなかった。

暑い夏の日の昼下がり、勉三は自分に割り当てられた二坪ばかりの畑の水

遣りにやって来て、驚くべき光景を目にした。一つだけようやく実を着けた自分の畑の冬瓜（とうがん）の皮面一杯に、墨黒々と「へのへのもへじ」が書き込まれていたのだ。周りにいた塾生たちは一斉に笑い転げたが、勉三は何故か無性に悲しくなり、涙が零れそうになった。その日の午前中、年長組は三余先生の書「穀菜（こくさい）は命の本にして農は国の大本なり」「天地自然は無を有と成し小を大と成すこれ無限の天恵なり」を手本に、習字の練習を行ったばかりであった。

騒ぎを聞きつけてやって来た先生は、黙ってその場を去り、やがて羽織袴に身を正し、真っ白い濡れ手拭いを手にして戻って来た。そして、落書きされた冬瓜の前に正座し、深々と頭を下げ、一言「わたくしの指導が至らず、まことに申し訳のないことを致しました」と謝り、白手拭で丁寧に墨を拭った。心なしか、目の前の先生の小さな肩が細かく震えているように見えた。

勉三は弾かれたように冬瓜の前に這い蹲り、頭を下げた。声もなく呆然と立ちすくんでいた周囲の塾生もまたそれに倣った。三余先生の全人格とその思想が、勉三ら若き門人の魂を捉え、その深部に火を点した瞬間であった。

『大いなる思想・精神・意識が人の心・魂を深く捉えると、それは巨大なエネルギーに転じ、大いなる行動力を生ぜしむ』との格言がある。まさしく三余の全人格と全思想を懸けた〝全人的教育〟が若き門人たちの魂を激しく捉え、巨大なエネルギーに転じ、新たな歴史を創造する原動力となっていったのである。

（十三）

三余はまとまった形での教育指南書・思想精神論の書を遺していない。また子弟たちも、あまり「三余の思想・精神」について語ろうとしていない。なぜか？

三余先生は、言葉よりもその実践・実行を何よりも重んじた。思想・精神の体得こそが重大事であった。先生も子弟も何よりも「実践躬行（じっせんきゅうこう）」、すなわち必ず知を行動に移し、自ら先頭に立って実践実行することを自らの生き方とし、信条とした。その教授・指導の方法は、言ってみれば職人的なもので、精神の体得こそが肝心要のことであったのだ。

それ故、三余の教育思想・精神を知るには、三余とその子弟たちの全行動、全人生を掴み、洞察し、理解することが是非とも必要となる。

既に書き記したように、地元松崎と伊豆開発を先導し、僻村の地にいち早く豆陽中学（後の下田北高）を設置し、更に欧米列強の侵出に抗する小国日本を経済的に潤すべく養蚕を盛んにして生糸貿易に多大の貢献をなした豪農依田佐二平。その弟で北海道十勝原野開拓の礎となった「晩成社」を結成し、辛酸を楽しみ、不屈の精神をもって鋤鍬を振るった依田勉三。更には依田善六、近藤有寿、土屋準次、石田房吉、大野恒哉、松田六治郎、大石唯四郎、藤野圭二等々の多くの若き門人たち。彼らは、維新後、伊豆郷里の各処において自らの財を尽くし、海路・道路交通路を開き、学校を設立し、産業を興し、郷土の発展に身を捧げている。衆目は一致してそれら全てが三余先生薫

陶の成果であることを認めている。三余門下の若者たちは、明日の日本の農と郷村・社稷を導く大人材たるべく、必死に学び、よく師の期待に応え、三余精神を自らのものとし、巨大な熱源・エネレギーに転化せしめたのである。

著者は、松崎の精神的伝統を辿り、三余及び三余塾門下生の生涯を辿り、その行い・行動の語る真実を繰り返し考察・探求して来た。その結果、三余精神を次の三項目まとめるのが適当であろうとの結論に達した。

≪三余精神≫

立志（りっし）

世のため人のため古里のために尽くす志を持つ

至誠（しせい）

不屈の意志を固め、怠ることなく誠実に行い、励み、探求する

共恕（きょうじょ）

共に思いやり、共に助け合い、皆で力を合わせ、協力共同する

これは三余精神であるとともに、古来より故里・松崎に流れている、誇るべき精神的伝統である。

（二〇二四年二月十日）